

## 日英におけるユースバンドの役割

2017年6月、留学を終え現在母国日本で音楽家としての活動をはじめ4年経った。そんな今の私自身から再度見る英国の文化や風土の研究、また英国金管バンドを見つめ直し古巣コーリーバンドでの演奏を行いに再度渡英をしてきた。

今回は主に私が住んでいた英国南西部にあるウェールズ地区と、北西にあるアイルランドを旅してきた。そんな両国は日本でも有名なケルト文化やゲール文化が未だに色濃く街に溢れ、情緒や伝統的文化を守っている。例えばウェールズでもアイルランドでもその地へ一歩足を踏み込めば標識や案内板などは全て両国の言葉であるウェルシュ(Welsh)やゲールック(Gaelic)と英語がそれぞれ併記されているほどである。またこれらの文化に金管バンドが強く結びついていることは言うまでもない。



さて御存知の通り英国式金管バンドは英国で生まれ産業革命の発展や救世軍らによる活用によって幅広く演奏され始め、その後様々な偉人たちの功績により日本の吹奏楽と同じように各市町村にそれぞれ一団体以上ずつあると言っても程多くのバンドが英国に存在するようになった。

しかし近年、英国において大繁栄した金管バンドではあるがその勢いは徐々に衰退し、ここ10年ほどで登録されている奏者は2万人を切り、またバンド数も500団体ほどとなった。(英国金管バンド業界では各種コンテストに出場するために"Registration Card"という奏者登録証が存在する。それにより各奏者の所属バンドやこれまでの経歴、また奏者の数やバンドの数を把握することができる。)

これに危機感を感じた各トップセクションのバンドや奏者たちは各々の地域でユースバンドやアカデミーを創設し児童や地域の人間に金管バンドの存在や楽しみを提供し奏者やファンの増加に務め始めた。

元より第二次世界大戦後の1947年、イングランドのとある地域の教師たち3人が始めた"全英ユースバンド"(National Youth Brass Band of Great Britain)が始まりであった全英ユースバンドはデニス・ライト博士を指揮者に据え第一回目のコンサートを開催。その後全英ブラスバンド指

揮者協会やかのハリー・モーティマーらの尽力により全英ユースバンドのみならずイングランド、スコットランド、そしてウェールズとユースバンドは細分化されより多くの若い世代により高い質の金管バンドを経験させることに成功した。このような地盤が英国においてユースバンドを作る見本、そして文化の一つとして存在している。そしてここ数年、多くのバンドが個々にユースバンド活動を始めた。

例えば、イングランドの強豪バンドの一つブラック・ダイク・バンドではイングランド北部に広がるヨークシャー地方から11~21歳まで幅広く奏者を募集し、“ダイク”の首席奏者らによるレッスン、音楽監督のニック・チャイルズ自らによる指揮での演奏の体験、また直接“ダイク”との共演コンサートを行うことにより地域の金管バンド人口の増加、また活性化を行っている。



またマンチェスターより南西部を拠点とする強豪バンドであるフォーデンス・バンドも熱心にユース活動をしている。このバンドは21歳以下の奏者を集めたフォーデンス・ユースバンド、更に下の年代である18歳以下の青少年を集めたフォーデンス・ジュニアバンドと2つに分け幅広い年齢層やレベル向けに金管バンドの窓口を広げ第一線で演奏している奏者たちとの交流や地域の活性化に貢献している。またその他にもソロコンテストも毎年開催しており世界中の若い奏者たちに沢山の機会を与えている。



そして最後に英国はウェールズのコーリーバンドのユースバンド“コーリー・アカデミー”である。当時私がまだバンドに在籍していた2013年3月に発足したこの企画は、上記したイングランドのユースバンド同様未来の金管バンド奏者や観客を増やし英国における“金管バンド”という文化を守る目的として発足をされた。他ユースバンド同様、私を含め各セクションの奏者たちが交代で指導者として指導をし、プリンシパル陣が指揮や運営に携わっていた。



当初まずは3ヶ月間のプログラムとして地域に呼びかけた所、計8バンドより合計100名の応募が殺到した。コース期間中には写真のポーズ地区コミュニティ学校にて毎週末講師陣による講習会が開催され地域の金管バンドの発展に寄与した。その後3ヶ月後の同年6月にはコーリーバンドのお膝元であるトリオキー地区にあるパーク&ダーレ劇場において初の演奏会を開催した。

写真は演出の確認中、筆者はエキストラでのアカデミー賛助を行った。

その後今回の渡英の際現在のコーリー・アカデミーについて取材をした。そんな折、渡英期間中にもアカデミーの演奏会があるということで視察に向かった。

会場はウェールズ中部にあるプレーコン、村内を運河が流れるとても美しい村にあるホールでの開催。リハーサルから視察させてもらいます驚いたのは、ユースバンドではあるが大人も混じりバンドに参加していたのである、数人いた大人の奏者たちも子どもたち同様地域の金管バンドより参加しており子どもたちとともに指導や演奏を楽しんでいた。一番遠いところだと車で二時間ほどかかるニューポートより来ている奏者もいた。

この演奏会のためだけに新曲(Spirit of Brass/ David Collins)が作曲をされ披露されるなど初めて金管バンドに触れる子どもたちから普段から地域のバンドに所属し今回アカデミーにて研鑽を積んで演奏している子供や大人まで幅広い背景を持っている奏者によって演奏されていたこのコンサートは大いに盛り上がった。その後アカデミーの演奏だけでは



なく、母体のコーリーバンドも演奏に加わり、その世界ランキング一位の演奏を観客だけにではなく、共に吹くアカデミーの子たちへも夢と希望を与えていたように思う。

当日のプログラムにおけるアカデミーの説明で、英語表記の後に右下にウェールズ語での表記がある。地域に根ざした活動をする上での工夫が垣間見える。

さて我が国のユースバンド事情である。

日本における例を挙げると、厚生省と山本教授のもと1985年創設”全日本こどもの城ユースブラスバンド”、そして現在活動している1981年創設栃木県の”雀の宮ユースバンド”、2005年創設の愛知県”大高ブリリアントブラス”、2017年に創設された山形県”上山ユースバンド”がある。また茨城県”ネクサスブラスバンド”においては金管バンドに限らず地域の小学校から高校まで幅広い年齢層の子どもたちに金管楽器の指導を行っている。

このように少数ながら我が国にもユースバンドが存在しているが、そのとても重要な役割に比べ、数はとても少ない。御存知の通り、現状小学校クラブ活動において金管バンド（金管バンドの形態をした金管アンサンブルの場合も含む）はよく用いられている。世界的に見ても我が国の小学校金管バンドのレベルは同年代の他国の金管バンドに比べ高水準であると言ってもいいだろう。

しかしこのような状況の中、小学校を卒業後に金管バンドを続けられる環境が現状ほぼ皆無である。もちろん近年一般金管バンドの数こそ増えてはいるが、大半が社会人によって構成される一般バンドに小中高生が入団をし活動を継続するのは簡単なことではない。

そこで上記した英国のユースバンドのように、まずは一般バンドや我々のような金管バンド指導者によるユースバンドを作り、子どもたちが気軽に金管バンドに触れられる機会を作るべきだと考える。

まずユースバンドの利点として以下の例がある。

- ・既に起こっている少子化により児童や子どもたちの数が減少している昨今、吹奏楽や管弦楽に比べ28人基本編成で演奏ができる金管バンドは今後高等学校教育においても活用し易い音楽である。
- ・基本的な記譜構成が移調されたト音記号譜のみでの記譜になっているため”ド”や”ソ”などの簡単なイタリア語での指導ができる。
- ・また打楽器以外の楽器が全て大小のマウスピースでの演奏法により演奏されるため他アンサンブル音楽に比べ指導がし易い。
- ・英国においてはすでに半世紀以上ものユースバンドの歴史があるため楽譜や指導法なども取り入れやすい。

あげればキリがないほどの利点がある金管バンドのユースバンドであるが企業—協会—教育機関—一般バンドらこの4つの関係性を深め、より連携を強めることによりこの運動は成功に近づくと考える。楽器の調達、指導者の育成、適切な場所、資金など行うことは山積みであるが我が国の将来的な音楽教育や人間育成、また音楽業界のために引き続き尽力をし続けていきたいと思う。

河野一之